

儂邇町郷土誌 続編二





溝辺町郷土誌 続編二





溝辺町章

溝辺町の『み』を図案化して、本町の和と躍進の姿を象徴したもの。

町民憲章

私たちは遠い祖先より受け継いだ、みどりの山河、美しい人情、歴史に輝く伝統を背景として、郷土愛とたくましい生活意欲をもって住みよい豊かな溝辺町を建設するためにこの憲章を定めます。

心を合わせて 平和な町を築きます。	○総 親 和 ○精 神 運 動	○善意の出発 ○協 調 性 ○自主・責任 ○親切運動
きまりを守り 住みよい町を築きます。	○法治国家としてのよ い市民性の育成	○明 正 運 動 ○交通安全 ○伝統と文化 ○時間厳守
生活を工夫し 豊かな町を築きます。	○勤労意欲と生産性の 向上	○生 産 学 習 ○新生活運動 ○生 活 改 善 ○貯 蓄 推 進
体をきたえ 明るい町を築きます。	○健康と町内美化	○社 会 体 育 ○健康管理 ○三 不 良 運 動 ○環境衛生
楽しい家庭をつくり しあわせな町を築きます。	○家庭と人間関係 ○社会連帯感	○家 庭 の 日 ○青少年育成 ○話 し 合 い 学 習 ○報 恩 感 謝

町木 しゅろ

ヤシ科の常緑樹。
原産地は明瞭ではないが、南九州ともいわれる。
野趣に富み、南国的情緒豊かで、街路樹、庭園樹としてよい。
最近化学製品におされて全くかけをひそめたが幹皮の繊維でつくったしゅろ縄、ブラシ、ほうきなどは古来生活の必需品として広く活用され親しまれてきた。



溝辺町民歌

作詞 岩元喜吉
作曲 岩元 寛

一、みどりの森よ

嶺にひらける

文化を運ぶ

ああ、青空の

伸びゆく溝辺

山陵の

エアポート

ぎんよくに

幸をくむ

わがふるさと

二、

上床やまの

巢立つ小鳥の

あがるうたごえ

ああ、清新の
育てむ溝辺

若葉かげ

生きいきと

高らかに

風がなる

わがふるさと

三、

かがやく大地

勤勞の意気

豊かなみのり

ああ、躍進の
興さむ溝辺

噴く水に

たくましく

築く手に

明日をよぶ

わがふるさと



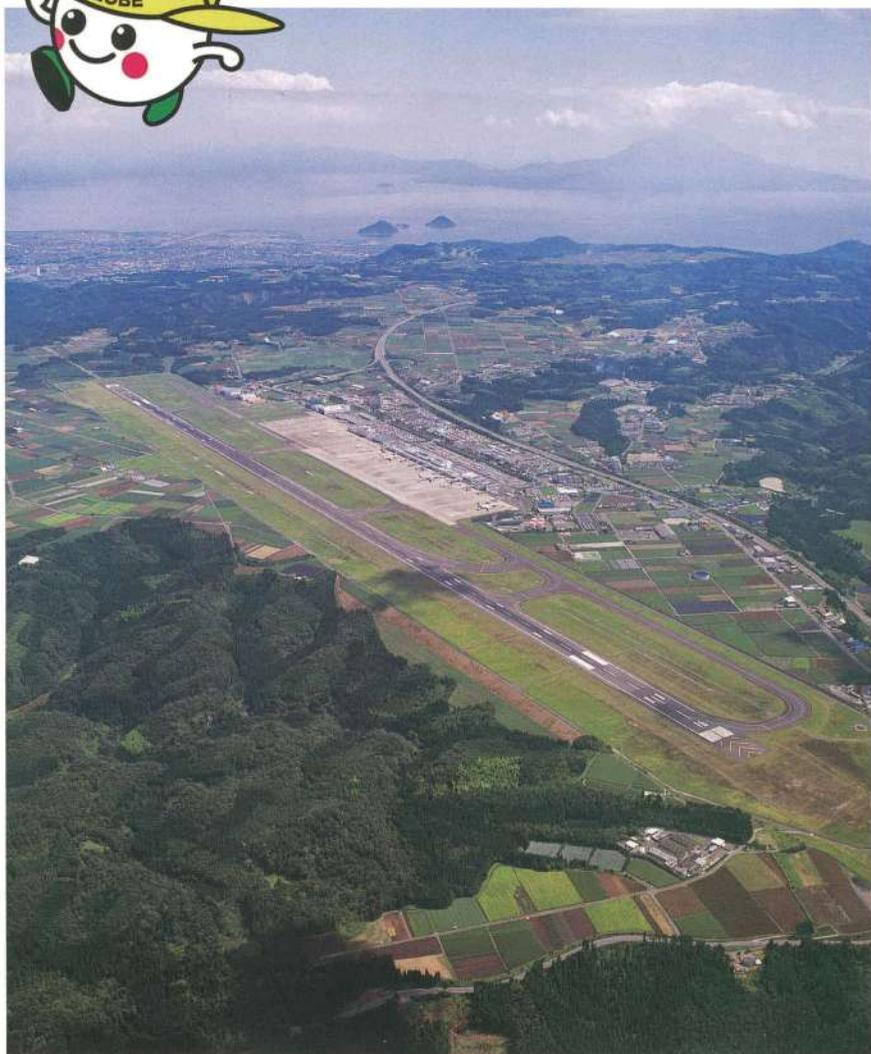
町花 梅

バラ科に属し原産は中国といわれるが、わが国でも古くから親しまれ、万葉集、古今集などにも数多くうたわれている。

極寒に耐え、春にさきがけて花をつけるさまは「忍耐努力」に通ずる。特に清楚で美しく、香り高い花は古くから広く親しまれている。また梅干しは食物の腐敗を防ぎ消化を助けるとして、昔から珍重されている。



イメージキャラクター
「カッピィ」

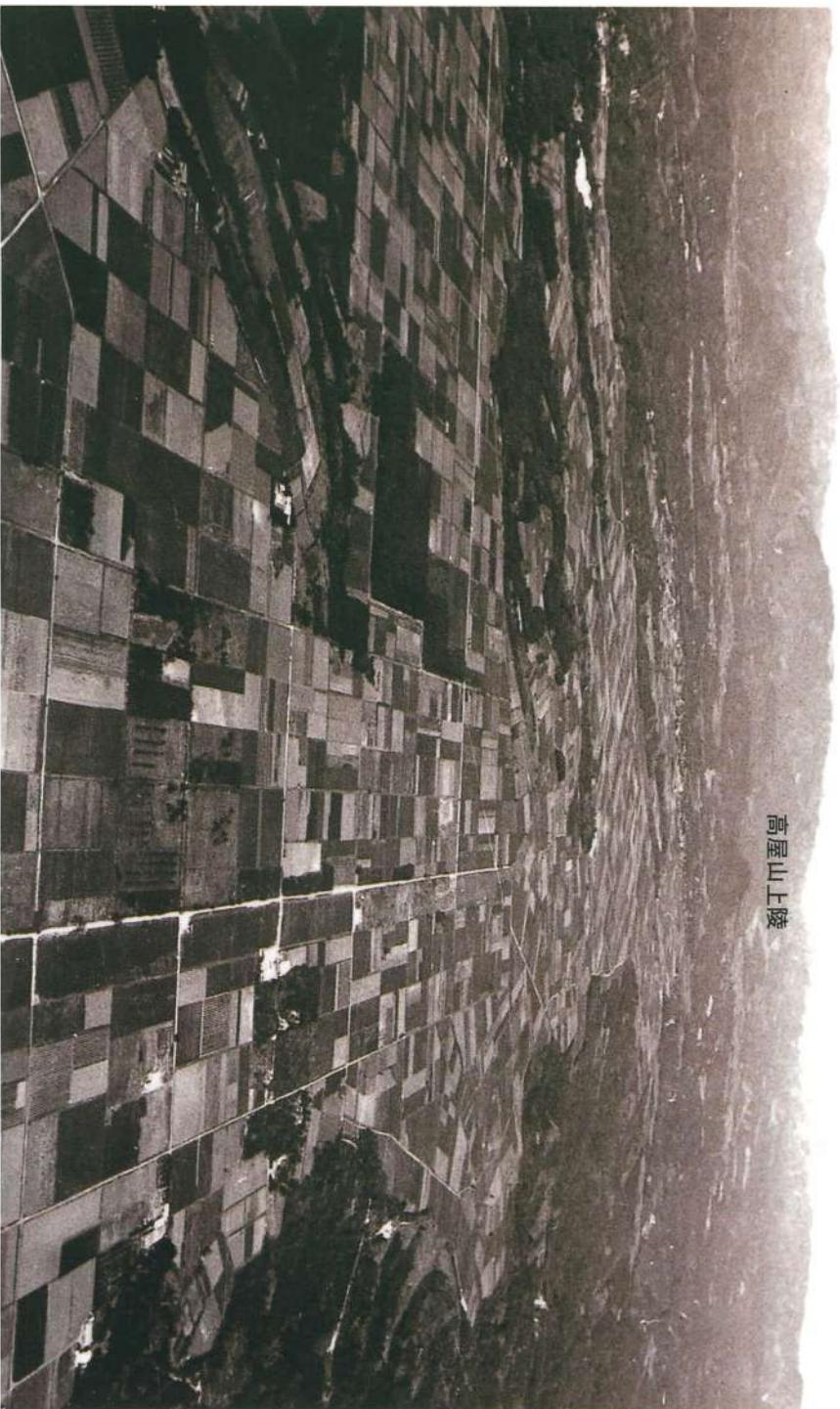


鹿児島空港全景



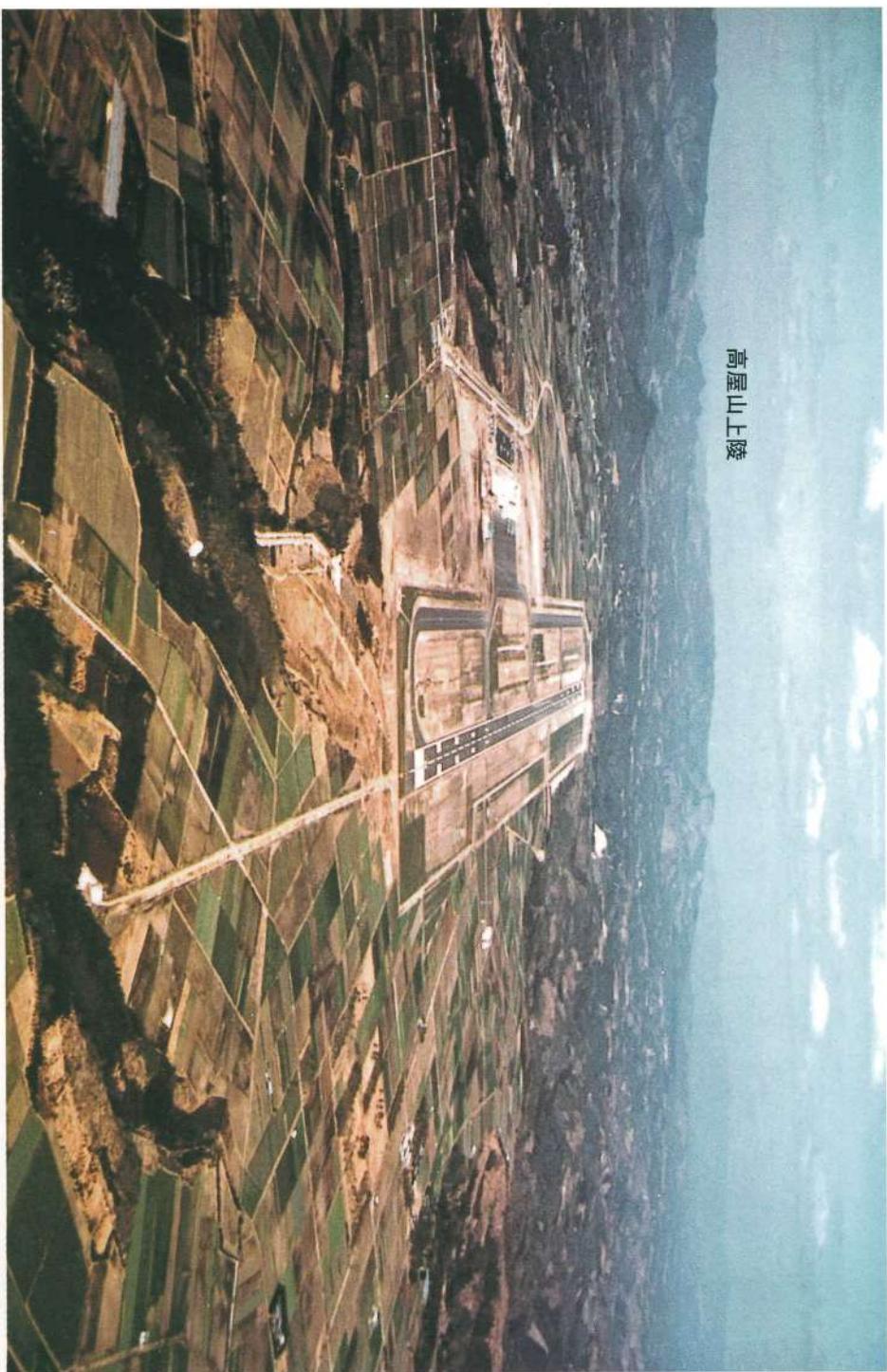
上床公園上空から

高屋山上陵



昭和43年7月 工事着手前の新鹿兒島空港建設予定地

高屋山上陵



昭和47年4月 工事完成後の新鹿見島空港



廣道お略地圖

例 凡

	田開益社		村界
	縣道		里道
	新街道		大字
	學校		山
	神社		野
	拓地		河川
	山陵		平野
	山		山

大正七年十月二十日
 廣道お略地圖
 製圖者

溝辺町全図





溝辺町グリーン文化ホール
みそめ館ホワイエの絵画

桜 F 百号

作者 市川 保道

一九九一年作

平成五年十月九日

多摩美術大学理事長

寄贈者 藤谷 宣人

(溝辺町麓出身)



連峰暮色（霧島） F 六〇号

作者 長野 英

一九九三年作

平成五年十月九日

溝辺町麓

寄贈者 吉村 勲



早曉桜島（北岳） F 百号

作者 京田 徹夫

一九九三年作

平成五年十月九日

寄贈者 鹿児島空港ビルディング株式会社



同床異夢 F 百二十号

作者及び寄贈者 神川輝彦

昭和六十三年作

同年「南日美展」入選作品

この作品は、コミュニティセンターに展示されていたものを文化ホールみそめ館完成にあわせ、展示場所を移転、展示効果を高めるため、ホールに常設した。



野村秀男
(平成3年)



松山 績
(昭和51年)

溝辺町一類功労者



岩元勝芳
(平成16年)



今吉 衛
(平成11年)



有馬四郎
(平成3年)



第19代
岩元秀則



第18代
今吉耕夫



第17代
福永春雄

歴代議長



第23代
笹峯 護



第22代
福永 忍



第21代
藏園幸夫



第20代
春田 忍



野の稔り（昭和初期の農村風景）

岩元東四男（昭和50年代制作）

刊行のことば



本町の郷土誌は、昭和四十八年十一月、新鹿児島空港の開港を記念して初版が発刊され、平成元年四月、町制施行三〇周年を迎えるにあたり続編一がまとめられました。以来十余年、ここに平成前期史として続編二が刊行される運びとなりました。県下三山陵の一つである高屋山上陵を仰ぎつつ、その時代時代の先人たちが、ふるさと溝辺を想う燃える情熱と温かい思いやりの心で、新たな歴史と自然、活気に満ちあふれた溝辺を築いていただきました。その功績は、次世代に正しく伝えるべきもので、新しい溝辺にとつても大変意義深い指標になるものだと思います。

我が町は、「みどりの大地、未来に翔ばたく空港の町」をキャッチフレーズに、上床公園を生涯学習の森に位置付け、グリーン文化ホールみそめ館、どーむ等を建設し、文化・教養・スポーツの拠点として大きな役割を担うなか、空港の町にふさわしい都市形成の一環として麓第一土地区画整理事業に着手、みどり豊かなゆとりある住みよい町づくりを推進しています。

ところで、平成十二年四月、地方分権一括法が施行され、住民に最も身近な市町村の責任が強化され、自治能力を高め、自己決定、自己遂行による個性や魅力ある町づくりが強く求められて参りました。加えて、日常生活圏の拡大による広域的視点に立った行政サービスや少子高齢化への対応、厳しい財政状況打開策として行財政の効率化・合理化等が緊急の課題となり平成の大合併が国策として進められています。

我が町も始良中央地区一市六町（国分・隼人・溝辺・横川・牧園・霧島・福山）で法定合併協議会を設置、協議を重ね推進してきたところですが、協議がほぼ整った時点で、真に晴天の霹靂、合併協議会からの離脱決議を本町議会が行い波乱を起こしてしまいました。つまり、町長と議会の対立が生じたのであります。議会の翻意を促すべく東奔

西走の努力も実らず、結局、溝辺町有史以来の住民発議による住民投票により決着をつけることになった次第でした。結果については三択の中から圧倒的多数をもって一市六町の広域合併が選択されました。

溝辺町は、明治の大合併と言われる市町村制公布の際、竹子・三縄・有川・麓・崎森の五つの村が合併して溝辺村が誕生、その後昭和三十四年四月町制を施行し今日に至っており、一五年の歴史を刻んでおります。一市六町が合併しますと「霧島市」誕生となりますが、その為には、この十二月議会で配置分合議案の議決が必要となります。

霧島市は向後一世紀吸収合併の憂いはないと確信するだけに私たちも実現に全力を尽くしたいものです。こんな状況の中で出版であります、編集委員会を中心に皆様の御協力、溝辺町郷土誌続編二が刊行されました。心より喜び合いたいと思います。

平成十六年十二月二十三日

溝辺町長 有村 久行

感謝

二十一世紀になって、社会は、科学技術の著しい発展や情報化の進展により各地の情報を瞬時に入手できるなど、高速ネット化された新しい世界へ変化しようとしています。

このような情勢の中で、インターネットや携帯電話の普及による情報化、国際化、人口移動などによる都市化や過疎化、出生率の低下による少子高齢化、そして科学技術などの進展により、我が国の経済や社会の状況も大きく変動しつつあります。そういう中で、市町村合併問題が大きく取りざたされるようになりました。

教育委員会では、溝辺町としての平成史を集約し、後世に残すことが責務と思い、平成十四年十二月、郷土誌編集委員会を発足いたしました。

本町の郷土誌は、明治百年並びに新鹿児島空港開港記念とを併せた昭和四十八年十一月三日に「初版」が発刊され、その後町制施行三十周年を機に、平成元年四月一日「続編一」が刊行されています。今回編集する平成史はこれを、「続編二」としてまとめることになりました。

編集委員会は、会長岩元勝芳氏、副会長今吉衛氏、主筆二見剛史氏、第一部(行政)会長岩下奎吾氏、第二部(産業経済)会長上原良喬氏、第三部(教育文化)会長山口隆治氏等を中心にお願いたしました。各部会の積極的な資料収集・整理・原稿執筆と、岩元会長や二見主筆らの献身的な原稿校正等により、すばらしい郷土誌がここに完成しました。

「続編二」の巻末には、今までの郷土誌すべての「総合索引」が付けられているのも特色の一つです。私たちの生活の歴史的背景、我が町の歴史や先人の働きについてさらに理解と関心を深め、溝辺を愛する心情を育てるのに役立つ郷土誌であると誇りに思います。編集・執筆に係わってくださいました多くの方々からお礼申し上げます。

平成十六年十二月二十三日

編集を終えて



四文字熟語の小辞典を手にして、日本文化の基礎は中国文化にあるとの思いをしみじみ深くしています。それは、その多くが四書五経を始めとする中国の古典によっており、普遍的な光を放っているように思うからです。その一つ温故知新の四文字もよく耳にしますが、郷土誌づくりも正しくこの意から出たものと思われず。

郷土誌づくりは過去を省みず、前へ前へと突進する昨今の風潮。或いは、物の豊かさで食欲などの基本的欲求が、満たされ易いが故に発生する自己実現のための高次欲求が満たされずに苛立ちやすい環境だけに、大変に大事なことだろうと思います。

今回の溝辺町郷土誌づくりは昭和四十八年に明治百年誌として発行の創刊号、平成元年に昭和後半の記録誌として発行の続編一に続くもので、平成前半の記録誌として考えていました。しかし、政府指導による平成の市町村合併の動きが急で、本町も来る平成十七年新しく発足する「霧島市」に加わるとの固い町長方針につき、最終編となるかも知れないものです。

その重みを十分に發揮し得たとは思えません、各位が先人たちの努力・町の変容を偲ぶなから新しい価値や意義を発見して頂きたい。且つ、夫々の人生設計と郷土の発展をお計りいただければ幸いです。

最後に乏しい資料・短い時間のなかで編集作業を完結くださいました主筆・部長さん方を始めとする編集同人事務局諸兄の並々ならぬ努力に心から敬意を表しお礼を申し上げます。

平成十六年十二月二十三日

溝辺町郷土誌編集委員会会長 岩元勝芳

目次

刊行のことば	有村 久行
感謝	壹岐 修
編集を終えて	岩元 勝芳

第一部 総論編

第一章 溝辺の素顔	2
第二章 時代の変遷と地方の役割	13
第三章 二十一世紀の新たな潮流	17
第四章 町民の自治組織と活動	26
一 行政伝達組織から自治組織へ	26
二 自治公民館の活動	26
三 自治公民館連絡協議会	50
四 自治公民館未加入世帯の状況	52
第五章 鹿児島空港と共に	55
第六章 西郷隆盛像建立と西郷公園	78
一 現代を見詰める西郷隆盛銅像	78
二 募金目標一億一千万円に向けた取り組み	81
三 西郷公園管理組合	82
四 NHK大河ドラマ「飛ぶが如く」と西郷隆盛常設展	85
五 西郷公園オープンとその後	86
第七章 地域開発	91
一 農村工業団地と企業立地	91

第二部 行政編

第二章 議 会	130
一 議会審議の状況	130
二 歴代議長・副議長	133
第二章 行政・組織・機構	134
一 歴代三役	134
二 表彰―輝く功績	137
三 町制施行記念式典	144
四 行政機構	146
五 開発公社	147
第三章 行政財政改革	151
一 行政改革大綱	151
二 指定金融機関とベイオフ対策	154
第四章 企画・財政	158
一 溝辺町の長期振興計画	158
二 財政状況	169
第五章 消防と安全対策	183
一 消 防	183
二 北部開発と溝辺カントリークラブ	94
三 公営競技場外施設の誘致	97
第八章 選挙の記録	104
第九章 地方分権と市町村合併	108
一 地方分権の推進	108
二 市町村合併	109

二	交通安全対策	188
三	防災のための集団移転	190
四	防災行政無線	192

第三部 産業編

第一章 農業振興

一	農業の基本方針と施策	196
二	食糧・農業・農村基本法	198
三	農村総合モデル事業	199
四	受委託作業の動向	206

第二章 農業の動態

一	農業に関する基本課題	207
二	農家構成の動向	209
三	農業生産の動向	215
四	農業をとりまく法関係	242
五	農業振興諸団体	249

第三章 農業委員会と土地利用

一	農業委員会	254
二	土地利用の変遷	261

第四章 土地改良と水

一	土地基盤の整備と用排水施設整備	262
二	県営畑地帯総合土地改良事業	263

第五章 農業諸団体

一	あいら農業協同組合	285
二	かごしま中部農業共済組合	305

三	農村婦人活動	309
---	--------	-----

第六章 林業振興

一	林業に関する基本方針	315
二	林業地域総合整備事業	318
三	森林組合・営林署の変遷	332

第七章 商工業

一	商業・サービス業の発展	334
二	溝辺町商工会	339

第四部 住民福祉編

第一章 民生・福祉

一	住民福祉	344
二	民生委員	348
三	国民年金	350
四	児童福祉	353
五	老人福祉	354
六	老人クラブ	362
七	シルバー人材センター	363

第二章 医療・保健

一	疾病の状況と国民健康保健	367
二	保健施策	377
三	平均寿命等	380
四	医療機関・薬局・デイケア	382
五	食生活改善推進員	384
六	増健補導員	385

第三章 環境衛生への配慮

一 霧島伝染病棟組合の廃止

二 一般廃棄物

三 始良郡西部衛生処理組合

四 溝辺町衛生協会

第四章 生活と水(飲料水)

一 水道事業の変遷

二 第四次計画

第五章 福祉団体と組織

一 保健福祉センターの建設

二 溝辺町社会福祉協議会

三 溝辺町高齢者総合ケアセンター

(特別養護老人ホーム及び併設施設)

四 老人給食サービスの開始

五 福祉作業所の移転整備

第六章 溝辺町ふれあい温泉センター

一 温泉再掘削事業

二 泉質

第五部 通信・交通・土木編

第一章 通信

一 郵便

第二章 交通

一 交通に関する基本方針

二 交通圏域・交通量

三 国道・県道・町道の現況

第三章 河川

一 主要河川(二級・準用)の状況

二 地方分権等で生じた里道・水路の状況

第四章 防災

一 急傾斜地崩壊対策事業

二 公共土木災害復旧事業

第五章 都市計画

一 都市計画事業の変遷

二 区画整理事業の状況と展望

三 今後の都市計画

第六章 住宅

一 現状と課題

二 計画推進体制の整備

三 公営住宅

四 一般住宅

第六部 教育・文化・体育編

第一章 教育行政機関

一 教育委員会

二 教育委員会事務局

三 社会教育委員と公民館運営審議会

四 文化財保護審議会

第二章 溝辺町教育行政の重点施策

388

388

389

389

389

393

393

396

408

408

409

413

415

416

417

421

426

426

430

434

434

434

434

434

434

434

435

438

440

440

441

442

442

442

442

443

443

444

444

444

447

447

447

447

447

474

474

474

475

475

476

477

479

一 基本方針	479
二 施策体系	479
三 生涯学習の推進について	480
第三章 学校教育	481
一 指導行政の重点	481
二 小学校	483
三 中学校	491
四 児童生徒数の推移	499
五 児童生徒の体位・発育の状況	500
六 完全学校週五日制への移行	508
七 PTA会長等	509
八 学校給食	512
第四章 幼児教育	516
一 陵南幼稚園	516
二 保育園	518
第五章 社会教育	525
一 みそめ館の建設	525
二 生涯学習講座（公民館講座）	532
三 国際交流	536
四 読書活動・図書室	539
五 溝辺町人材育成基金助成金	540
六 青少年育成町民会議	541
七 溝辺町青少年学習事業	542
八 子ども会育成連絡協議会	544
九 生活学校「白菊会」	546
第六章 文化と史跡	547

一 溝辺ふるさと祭り	547
二 文化協会の充実	550
三 文化諸団体の育成	562
四 文化財	567
第七章 社会体育	597
一 溝辺町体育協会	597
二 体育指導委員会	599
三 町民体育祭	600
四 駅伝競走大会	601
五 グリーンエアポート完走歩大会	603
六 溝辺町における社会体育施設	606

第七部 溝辺の今昔

第一章 ふるさとへの想い	614
一 高屋山上陵	614
二 歴史の道 大口筋	617
三 寺院・教会	619
第二章 みぞべ賛歌	636
第三章 郷土誌余録	643
溝辺町略年譜	673
索引	680
編集後記	二見 剛史